

遊びの指導



私は長年、幼稚園の現場の仕事をしておりますが、現場の立場から、幼稚園の遊びの指導について、お話ししたいと思います。

遊びと教育

幼児には遊びが一番たいせつで、それが生活のすべてだといってもよいと思います。幼児を遊びという生活の中においてみますと本当に生き生きとして、全精力を出して生活しているという感じを受けます。私もおとなには勉強したり、仕事をしたり、それぞれ人間として与えられた仕事がありますが、子どもたちにそれと同じ意味をもつものが遊びです。遊びの中でいろいろ経験し、自分でそれに体当りをしながら、そこでいろいろと学んでいるのです。

私もおとなにとっては、幼稚園は教育の場ですから、なんとか子どもたちをよりよくしたいという気持があります。そう思っ

堀合文子



て子どもに接する時、ともすると教育という頭の方が先に立って子どもたちの生活は、本当は遊びなのだということを知っていても、こちらのおとなの計画をつい出しすぎてしまう場が多いのではないかと思います。

私も本当は、子どもをおおいに遊ばせてやらなければならないということを知りながら、また、長年その線にそっていろいろとしてきましたが、それでもまだ、他の組の先生が歌をやっていたり、お遊戯をしたり、何か作らせたりなどしていらっしやると迷ってしまうのです。

こんなに遊んでばかりいたら大変という気持がおこり、このへんで迷ってしまうのです。けれどよく考えてみる時、一体どちらがたいせつでしょうか。そして子どもたちに十分遊びの生活をさせながら、教育をその中で行ない、経験も豊富にしてあげるのには、どうしたらよいのでしょうか。

計画があつてそれを子どもにすぐ与えるのなら、むしろ一番やさしいのです。これをこうなったからこうしましょう、この次はこれを楽しみましょうね、次はみんなで歌をうたってみましょう、今日はこういうのを作ってみましょうと先生がこれを指示してあげて、子どもがそれをしましょうとついてくれば、それで先生の方は一応自分の計画が十分できたと満足だと思ふのです。けれどもやはりさきほどから考えていますように、子どもの生活は遊びが十分でなければいけないし、その中で、先生の計画を生かしていかなければなりません。生かすというよりも、むしろ子どもの経験を先生の計画で広めて、幅広くしていくことが必要なのです。それには、どういう方法をとつたら一番自然にいき、また、効果も上がるかと考える時に本当にむずかしい問題だと思ひます。

そこで、次に一日の生活の流れにそつて、遊びの指導について考えたいと思ひます。

遊びの中に指導の機会をみつける

朝、子どもたちは、今日はままごとをしようとか、こういうことをしたい、ああいうことをしたいと希望を持ってやってきます。まず子どもたちの好きなぶらんこでも、ままごとでも、砂場でもいいでしょう。みんなそれぞれ好きなもので、ある時はひとり遊び、ある時は自分で友だちを待ち合わせたりして遊びに入っていくと思ひます。

この遊びは、たとえばブランコに乗ろうが、砂場で遊ぼうが、みんな子どもたちにとっては、学校の生徒さんの学習と同じ意味をもつものなのです。ですからそれだけに遊びをわれわれでたいせつに育てなければいけないのです。

実際にはただ楽しくブランコに乗ったり、乗れない人には、「ゆっくりと前へやったり、後へやったりしてごうのよ」（これはお互いに日頃くりかえしやっていることでしょうが）その中で、お友だちとかわりばんに乗せるとか、一人ばかり乗ってしまったもいけないから、いくつ数えたらかわるとか、いうことができず、だまってこいであげるよりもおもしろさを増してあげるために、知っているブランコの歌をおしながらうたつてあげたりするとそれで音楽リズムになるでしょう。なにも「さあ歌をしますからいらっしやい」とか「お遊戯をするからいらっしやい」と部屋に集めて、「さあそれじゃ今日はブランコの歌を教えてあげましょう」「ブランコゆらゆら、さあ一緒にいみましょう」というだけが音楽の指導ではありません。

ブランコをこいだ時にブランコがゆれているのが既にもう楽しいのですが、その上先生がブランコのリズムのようにおしてあげて、それに合わせて先生が、ブランコの歌をうたつてあげると、本当にゆれて楽しく気持ちよくいいリズムになるでしょう。その歌をきながら楽しいと、その歌は、わざわざ作られた場でなくとも、歌の指導にもなるし、それが本当に理想の歌の指導だと思ひ

ます。先生が何回もくり返してうたえば、自然に子どもたちの耳から入るし、一回目はうたえないかもしれないが、次の時には、モゴモゴやりながら合わせて、乗っている自分もその歌をうたうようになるでしょう。ここに自然に歌の指導ができたということになると思います。

そういう機会は考えてみるとそのへんにいっぱいころがっていることだと思えます。砂場でお山を一生懸命作っている時、だまって黙々とやっていないで、子どもたちは話をしていきます。「お山でダムを作るんだよ」とか「こっちに掘った方がい」とかしゃべっています。先生と一緒にする時、先生が「あら、何してんの？ お山作ってんの、いいわね」といって、手を出しもしないで砂場のへりにすわっているだけでは十分ではないのです。子どもたちは一生懸命で友だち同士もさかんに会話が行なわれていて、すばらしいのができかかっているところに、おとなが来て口を出すだけでは子どもたちの楽しい雰囲気がかえて消されてしまうこともあるでしょう。

それよりも、先生と一緒にあって、そこでダムの手伝いをしたり、よりよくダムを成功させるための手伝いをして、「よいしょ、よいしょ」とかけ声を入れてみたり、おとなが入っていくのではなく、子どもの友だちとしてそこに入っていくということがたいせつです。また、さっきのように、「山をつくらか、さらさらすなで」と先生がそこで思い出したら一緒にあってうたってみると

か、いろいろなことで、先生が入ったことによってより楽しい雰囲気を作り上げるということが、たいせつなことです。

そういうふうな機会は、方々にころがっているのです。今は歌のことを考えましたけれど、砂場に行ったから必ず歌をうたわなければいけないというわけではありません。

やはりそこはわれわれがよく観察して、そういう歌の出る雰囲気の時には、歌をうたったりします。より一層遊びが楽しくなつてより一層砂場遊びの経験が広くなるという意味で、そこがうたいたくなる場ならうたつてあげるし、また、もつと違うことをしてあげたくなる時はそれを与えてあげるといふふうに考えるのです。今の一例は歌ですが、場とか機会は、方々にころがっています。

ある時は砂場で、シャベルの取り合いをして、「ぼくのだ」とか「あたしが先に取った」とかいうことはよくあることと思えますが、そういう時も、子どもがその遊びに一緒になって入って、一緒になって遊ばないとほんとうの指導ができないと思います。

「××ちゃんがシャベルを取ってしまったの」という報告をきくだけでなく、一緒になってしていると、「ああ、それはこっちの貸してあげましょう」とか、方向転換もできるし、平和にそこを納められます。場所や機会があつても、その場に先生が居合わさないと、その報告だけによって判断をしまつたり、直接的な指導がなかなかできないのです。

やはり先生が一緒になって、子どもたちの間に入って機会をとらえて、ある時は生活指導、ある時は歌だとか遊戯だとか、時にはじっこ遊びにまで発展することができなのでしょう。そうして、私どもが一緒に遊びながら機会をとらえながら指導することが、遊びの指導に関して考えなければならぬことだと思えます。私もこれから幼稚園や保育園の先生になろうという人に話をする時に、まず一番はじめは、子どもたちと遊べる先生でなければいけないということをよく話します。

はじめて幼稚園の先生になると先生という立場にとらわれて、子どもに密接になるところが欠けてしまうので、私はよくそれを申し上げるのです。やはり子どもと一緒に遊んで、一緒になって生活して子どもたちと密接になって、お互いに安定感を持たないと、その上に立つ指導ができないのだと思います。

生活の段階をみきわめる

しかし同時にまた考えねばならないことは、子どもの遊びは年齢によって違うということです。遊んであげなければいけないから一生懸命遊んであげたところが、かえって子どもの遊びの妨げになることもあります。遊んであげるにしても遊びの中に段階があります。

子どもたちも日に日に社会生活が充実して、四月、五月と時期を経るに従って、友だち関係や社会性は、どんだんのびていきま

す。はじめは、ポツンと一人で遊んでいたのが、だんだん大勢のお友だちと遊べるようになります。先生が一緒になって遊ばなければならぬというのはおとなの側からいうたいせつなことですけれども、やはり、第一には子どもたちと遊びながら、子どもたちの発達を見ることが必要です。よく遊べるようになってきたから、違った面でもっと遊んであげましょうというふうを考えていかないと、さっきの砂場の例のように、かえって子どもたちの遊びをこわしてしまうような形になってしまふのではないかと思えます。

三歳は独特なものではじめは友だちとなかなか遊べません。そういう時には、先生は、おおいに遊んであげて、一日も早く友だち関係を作る仲立ちになってあげなければなりません。はじめは「こんどはかごめをして遊びましょう」とか、「こんどはこれをして遊びましょう」とか、こちらの方が遊びを提供して、「きょうはお砂場して遊びましょう」「お砂の山作りましょう」と、あきないようにするのが、入園当初、四月頃のありさまです。

先生が仲立ちになってきますとだんだん友だちができて、先生と離れるわけではないけれども、友だちの方がより楽しくなってきました。はじめは砂場でひとりでおだんごを作ったり、おとなとおだんごを作っていたのが、だんだん一人が二人になり三人になりしていくわけです。そこで楽しさが増してくるし、社会性もできてくるのです。

そうすると今度は、私どものとる態度は、はじめはまず先生がひっぱって、先立ちになって遊んでいたものを、そろそろ、子どもの方にうつしていきます。今まで十ひっぱって遊んでいたものも、五ぐらいにへらして、むしろ友だちとの遊びというものを育てあげなければならぬわけです。

それをみきわめるのが、一緒に遊んでいる私どものだいたい目だと思えます。それを気づかないで、折角友だち関係が芽生えてきているのに、先生が、声をかけて、「さあこうしましょう」と先生の方へ集中させてしまわないように、折角芽生えようとした、友だち関係や遊びをこわしてしまわないように、私どもが共に遊びながら、子どもの世話をしながら、それを見ていかなければならないところにむずかしさがあるのだと思えます。そうして、そっと友だちと遊びをさせておいて、先生は、まだひとりりしか遊べない人だとか、ぼんやりしてる人だとかに、声をかけて、そちらの方に先生の気持を向けて、そちらに集中して誘導していかなければならない時が来ると思えます。

次にそういう人たちもだんだん減って、このごろは殆どみんながよく遊ぶようになったという時期も次に来ると思えます。私は今ここで、こうかんとたんにお話をしますけれども、その時期というものは、そうすらすらと来るものではありません。ある時は、さっとそこへいってしまいかもしれないし、その年によって、子どもが違うだけに、ようすも経過も成長も皆違うわけです。

ある日はみんなが随分よく遊べるようになったと思う日がある。ある日なんかは、きのうは随分よく遊んでいたけど、きょうは全然遊ばないで、方々でボツンと立っている子どもがいるというような日もあつたりします。そういう日目を、波のように経過して、一年たち、二年たち、五歳の一番大きい組になるともう先生が安心して、「ああこのごろは、子どもらしくよく遊ぶ」、むしろ先生が遊ぼうと思っていると、お友だちの方がよくて、先生なんかいらぬくらい、朝来ると友だちに「××ちゃん遊ぼう！」といきこんで入ってきます。「砂場のつづきしよう！」とか「これをしよう」とか、そういうふうに、友だちの遊びの方が、むしろ上に立ってきてしまいます。

それはもちろん、遊び中心の生活ですが、いろいろな面にもそれができてくると思えます。そうなりますと、先生は浮いてしまうわけです。浮いてしまつて、「最近、月日もたつたし、よく遊ぶようになったから、まあいいわ」といって、先生はどちらかというと先に立って一生懸命遊んだ時から考えると、楽なわけです。身体は楽でしょうが、やはりそこで先生は子どもと関係のない仕事をしてすわりこんで、自分勝手な仕事をしたりあぶなくないようにぶらぶら監督していればよいというものではないと思います。友だちと遊ぶという友だち関係はできたかもしれませんが、やはり砂場でも、積木でも、それなりに遊びをのばしてやらなければなりません。そのためにはやはり、おとながのばす方向

に持って行ってやらなければならないことが、残っていると思いません。

子どもたちの一員になって遊ぶと遊びがのびる

前から申し上げたように、遊びは、子どもたちの一番たいせつな生活全体なのです。たとえば、たとえ積木一つ積むにしても、砂場のお山を作るにしても、少しずつそれなりにのびしてやらなければいけません。少しずつ階段をのぼるように、現在の遊びよりも高く持っていてあげるのが、子どもの務めだと思います。それがひいては、教師の立場としての計画へつながるものだと思います。

砂場などで山を作り、ダムを作り、そうして遊びはじめると、どんどんおもしろいものを考えてしていきます。ダムもはじめは水を入れなかったものを、先生が水を入れてみたりします。はじめは一本の単純なダムも、いろいろ曲ったりくねったりして、山を通ったりして流れるように工夫したりしてくるのですが、やはりその時にその状態をわれわれが見て、そこに今まで円筒の筒がなかったら、置いてあげるといふようなことが必要なのです。

「こんないいのができたから、今度こうしたらどう」と口でいうようなことよりも、だまって何かをやってあげるのがよいのです。一口に言えば環境を整備しておくことになるかもしれませんが、今までと違った材料を一つ二つそこへ加えておくと、先生が一緒になってそこへ入れてもらった時に、今までは一

緒になって同じのを掘ったものが、ちょっと違った形の材料を入れてやったりします。

水を流すのでも、ただ水を流していたのを、ふるいを入れて、その上から水を流すとそこで濾過式のものになります。そのようにして、先生がちょっと材料を置いておくことによって、そこで子どもたちがそれを使っていろいろと考えてくれるようにするのです。たとえば川があっても土手がなかったならば、土手をちょっと作ってあげます。それも「さあ先生は土手を作りますよ、今度こういう時は土手を作らなきゃいけないのよ、こういうふうに作るといいですよ」というふうに宣伝してするのではなく、だまってずっと土手を作っておくと、子どももこういうふうにするばいいのだなあということがわかってきます。それが次の子どもたちの遊びが一步前進するもとを作るわけなのです。

入園した頃の頃は、先生が「ここにお山作りましょう。ここには土手を作った方がいいわね」と提案することが多いのですが、年長になって活動が盛んになったら、むしろ、だまって一つ一つ、おくこと、だまって環境を整えておくことが、遊びを一つ一つ、一步一步指導していく一つの方法ではないかと思えます。一步一步前進させるためには、おとながいろいろ考えなければならぬのであって、いろいろしてしまっただけだと思いません。そこがむずかしいところでしょう。

そっとおいておくことは、結局子どもたちにそれを活用しても

らうことであり、そこから子どもたちが新たなものを作り出して、考えたりくふうしてもらおう機会を作ることなのです。はじめの小さいうちは、先生の方が言葉や動作で指導してきましたが、大きくなると、子どもたちの活動をおおいに尊重しなければなりません。それは活動が活発になればなるほど、おおいに活動してもらわなければならないし、その活動が一步一歩前進してもらわないといけないからです。そういうふうにして先生が、材料を置いておいたり、だまっていたことよって、それが誘導となつて、子どもたちが、創造性を働かすことができるようになるのです。

さらにまた、教師が提案したことに子どもが気づかない場合もあるし、それによって少しも遊びが進歩しないという場合も起こります。そういう時は先生が「さあこうした方がいい」「ああした方がいい」というのでなく、先生が一緒になってあそぶことが必要です。たとえば「ごっこ遊びで「魔法ごっこ」をやっている、ムニャムニャとやってハンカチを振ると、空をとべるようになる遊びをしています。なんとか違う言葉をいうと、身体が消えるのだそうです。消えたままでは困るので、また、なんとかいうと今度はもとにもどるといふような、よくそんな遊びをしています。そういうような場合、私もはそこに入れてもらって遊びます。入れてもらう時には、もう友だちと同等なのです。われわれも五歳児、四歳児になつて入っていきます。おとなとして

入っていくと、すっかり遊びをこわしてしまいますから、こんな大きな身体でも、五歳の子どもになつて、「いれてちょうだい」というと、入れてくれます。そして今のようにいろいろな言葉も教えてもらいます。ついこっちは、忘れてしまうので、せつかく消えても、もどる言葉を忘れてしまつたりします。「今度どうするんでしたっけ」ときいたりして遊びはじめます。そうして一緒に遊びながら、子どもたちの方からいろいろ規則を覚えてもらつて仲間に入つて遊びます。そうして遊んでいると、いろいろ問題に気がつくわけです。

年長児になるとけんかといふような問題ではないのですが、見ていると、そこまでの遊びから一步も出ないで、常に同じことの繰り返しになっているようです。そのような時には、たとえば魔法の例でいうならば、自分が魔法の仲間の一人ですから、自分で言葉を考えるのです。「先生が考えたわよ、いってごらんさい」という調子ではなくて、たとえば「一、二、三、ワン！」といったら、もしそんな言葉ができているのなら、ながながとした言葉を考えて「先生今度は何か動物になっちゃつた」とかいったりします。「なんとかムニャ、ムニャ、ムニャ」といって、「ピョン、ピョン、ピョン」なんて、うさぎになつて、勝手に自分で遊んでいるわけです。子どもはこれを見てないかもしれませんが、でも先生が勝手にムニャムニャムニャといつて遊んでいると、子どもが、「先生、それ何になつたの」とききにきたりします。そうなつた

ら、こちらはシメシメと思うわけです。そして材料を先生が提供したことになるのです。

「こうだからこういっています」「今度はそんなのばっかりでつまらないから、うきぎになるのにしない？」なんていうのでなく、自分自身が、子どもの一員になって、魔法の言葉を用いて、今度はみんなのしていないものをいろいろしてみると、やはり見た目は先生ですから、子どもが、「先生なあに」といってやってきてくれます。これはほんの一例ですが、そういうふうにするのと、子どもが今まで同じことの繰り返ししか遊んでいなかったものが、先生が友だちとして提供することによって、経験の幅が広がるのです。

そして遊びの中から、いわゆる教育的計画に持っていきたくれば、「今度あそこでこうしましょう」と形を整えて、音楽を入れて、劇遊びのように持っていくなど、同じようにしてできるのでないでしょうか。それがなかなか、やってみないと、むずかしいことなのですが。たとえば、子どもたち同士がよく遊べても、一歩ずつそれを前進させなければいけない、ただ積木を積んでいるのでも、そのままにしておくのではなくて、一歩ずつ、少しずつ、段を上がるように誘導したり、指導したりすることが、たいせつなことです。

そういうことがひいては、結局製作の面の基礎になったり、遊戯やお話遊びのものになるものではないかと思えます。そこを十

分しておくことが、いわゆるおとなが作った六領域というものを、十分に活動させたりする原動力になるのではないかと思えます。遊びをたいせつにして、子どもの遊びを日頃育てていくと、かえって私どもの計画を苦勞しないで、成功させていくものになるのではないかと思っています。

遊びというものがたいせつだということはお互いによくわかっているのですが、あらたまって考えてみないと、つい粗末にしてしまいますので、一応ここで考えてみたわけです。

次に一日の流れにそって、朝からのことを考えてみましょう。みんなが「おはようございます」と来ます。先生が「おはようございます」と子どもの顔を見ていう時に、保育が始まっているわけです。

一日の生活の流れにそって

これは、一日の出発として大切なことで、先生が朝の保育に關して一人一人の幼児にする挨拶によって、その幼児の一日が左右されるといってもよい位大切なものです。五歳児にもなり、二年、三年の幼稚園生活をしている幼児は影響も少なくなり、二が、年齢が小さい間、特に入園当初、何か月間は先生が特に注意しなければなりません。いさんでとびこんだ幼児が先生の顔がみえなかったり、そっけない形式の挨拶では、性格のよい子は泣きたくなくなったり、帰りたくなくなったりでしょう。にこにこやき

しくあたたくむかえられると気持ちほころび、泣くところも泣かないうちに遊びに入れるでしょう。

朝のむかえ方はこんなに大切なことで、その幼児の一日を支配する動力ともなるのです。

私どもの幼稚園では、乗物に乗ってくる人が多いので、約束ごととして登園したままずうがいをし手を洗います。そうすると今度は、ままごとをしたい人はままごとをしたり、外へ出たい人は外へ遊びにいきます。そして自分たちで遊びをはじめます。

年齢によって違いますが、はじめのうちは環境を整えておき、話などしないと入ってこないこともあります。

帰る前に、「あした続きをするからこのままにしておいてほしい」といって帰ることもありますから、そのまま残しておきますと、朝からその続きを楽しみにできて、すぐ入ります。かえって、きちんと片づけてしまうと入りにくいのです。まだなれないうちは、先生が準備しておいてあげて、だれかが遊んだのだと思うようにしておきます。きちんと片づけられているのでなく「ああ、あそこにごちそうが作ってある。あたしも作つていてあげましょう」というような気持が、それを見た時にわくような準備をしておいてあげねばなりません。また、絵本などは、きちんと立てておくのでは利用価値が少なくなります。子どもたちが自分から出して持ってくるほど、積極的になるまでには、日がかかりますから、絵本を開いておいて、そこに来たら、読んでみたくなる

ようにしておくのです。何かをしたくて幼稚園に来るにしても、やはり、そこに溝がありますから、はじめのうちは、こういう準備をしておきます。

はじめのうちは、遊ぼうとしても遊べない人もいます。遊べない人は、だんだんと数はへってまいります。やがて、そういう人が残っているわけです。そういう時には、先生が「今日はなんでもいいからして遊ばししょうよ。あなたの好きなこととして遊んでいいのよ」とか、その他いろいろ誘導して、遊びに導きます。

それから自分で遊ぼうと思っても、なかなか自分からそこへ行って遊ぶことのできない人がいます。そういう時は、先生の方からさそって遊びができる場合もありますから、誘導したり一緒に遊んだりして、なるべくみんなが一日も早く遊べるように努力します。

自分たちの、めいめいのひきだしなども遊び道具の一つで、クレヨンを出してきて、帳面に絵を描くというのも、積木と同じような遊びのもので、自分が好きな時にクレヨンで帳面に絵を描く、それも描いて遊んでいるわけです。そういうことも遊びの一つとして、自分たちで次々と考えて遊んでおります。

お弁当のある日はお昼まで一応このような遊びの形で指導しています。お弁当の時間や、帰る時は、みんな勝手に帰ってもらっては困りますし、勝手にお弁当を食べるのも、団体生活をしてますから、「じゃ、もうお昼になったからお弁当のおしたくをしまし

よう。みんな今まで遊んでいたのもきれいに片づけましょう」といって片づけませす。帰りももちろんそうですね。そういうふうにして、一応方々、三三五五遊んでいる形で一日をすごし、時間がくるとお弁当になり、お帰りになるわけです。

遊びの中に教師の計画をどのようにいれるか

ところが、ここには子どもたちの活動だけで先生の計画はまだ入っていないわけです。よく見学にいらした方が「いつ始まるのですか」とおっしゃるのですが、始まるのはもう既に朝一人来た時から始まるわけです。たとえ九時でも九時十五分前でも、お子さんがくれば、一人きた時からもう始まっているわけです。ですから、みんな集まって、こっちの方で遊んでいた人を呼び入れて、ここにみんなすわらせて歌をうたったり、すわらせて仕事をしたりするのが、始まったというのではないわけです。それは今まで遊びがたいせつだということをいろいろ考えてまいりましたからおわかりいただけると思います。

今度は一つ例をとります。今日仕事を何か計画することにしましょう。明日でも明後日でもお誕生会があるから、おやつを入れるかごを作ることになりました。今日は先生の計画としてみんなにかごを作ってもらいましょうという計画があるわけです。朝からそういう形態に入りますから、それをいつ出すかというのが問題です。どういうやり方でそれを誘導していくかが、

ここで問題になるわけです。その時にいろいろなやり方がありません。物を製作する時に、こういう方法で入っていかねばならないというきまりもないわけです。それはやはり、子どもの遊んでいる状態を見なければならぬわけです。そしてなるべくその時の状態にあった誘導のしかたで計画に入れなければならないという大きな問題があるわけです。

たとえば、みんなよく遊んでいます。お天気はいいし、砂場では、水だの砂だのダムを作ったりして、みんな夢中になってドロドロになって遊んでいます。こちらの方のグループでは、何かごっこ遊びをして遊んでいます。またこちらでもグループで遊んで、それぞれ熱中して遊んでいます。一応今日の計画は誕生会のかごを作ること、みんなに作ってもらいたいわけです。みんなに作ってもらいたいから、ある程度仕事を早く出さないと時間的にお弁当までに間に合わなくなります。早く出したいわけですが、みんなはそういうふうによく遊んでいます。先生の計画としては十時頃はじまれば、みんなが午前中にできるかしらと予定を持っています。十時になってみても、子どもたちは一生懸命過ごし夢中になって遊んでいるわけです。

そういう時の指導の一つの方法は、先生が、だまって、一人でもいいですから、自分のかごを作り始めるのです。その時はみんながよく遊んでいます。そんな時でも子どもはたえず子どもなりの要求をもってあっちこち動きまわっているのです。ある時

にはお手洗に行ったり、手を洗ったりしています。そういう子どもが、しょっちゅう出入りして活動していますから、先生が作っている」と先生、何してんの」と声をかけてくれる場合が多いのです。するとこちらでは「しめしめ」というところで、「あしたはおたんじょうかいだから、おやつ入れようと思って先生かご作ってるのよ」というのです。そうすると「じゃわたしも作ろうかしら」といってすぐ入ってくれるでしょう。またそういわない人は、「ああ、そう」と通りすぎてしまうかもしれません。それでもいいのです。

むりやりに「さあいらっしやい、かご作るから呼んできて」じやなく「あたしやろうかしら」ときた人がいたら「じゃ紙をあげるから、どういう形にしましょうね」と、そこから製作の指導に入るわけです。そして「お道具を出していらっしやい、こうするから」と相談して作るのです。そういうところから、一人、二人と始めて、製作が始まります。そうすると次の人が「〇ちゃんなにしてんの」とだんだんふえたり、へったりして、そのうちできあがった人が外へいって遊ぶ、また交代して入ってくる。そのうちには横目で見てだまって通っていらっしやい人もいるし、さまざまですが、交代して仕事が展開されるわけです。

そのもの自体がとて子どもの興味をひいたという場合には、むしろそれが全体に及ぼす場合があるのです。ちょうど見た目が「みなさんいらっしやい。今日はこういうの作るから、これあげ

ますよ」といってやったごとくに見えるのです。そういう時は、材料がとて興味をひいたものだったり、子どもたちのちょうど遊びのいい時期に出したのでしょう。いろいろ条件が集まって、みんなが一緒に興味を示してくれて、やってくれた場合はそうなります。ところが、入り方はもちろんちがっています。

計画に入つてこない子どもをどう考えるか

たいていの子どもが「あたしもやる、あたしもやる」と、だんだんに交代して行って、常に、二つのグループぐらいがしているのが多いようです。交代してそれはするのですが、そこに問題があるのは、全然知らないで遊んでいた、知ってても参加しようとしなない人もいます。今日一日でしてしまい、これに全部が参加してほしいと思うのに知らない人がいた場合には「今こういうの作ってるから、〇〇ちゃんも、もしよかったらやりきってちょうだい」と砂場の人とか、他の遊びの人にも声をかけたいでしょう。やっていることは知っていても参加してくれなかつたり、声をかけても中へ入ってきてくれない場合もあります。

そうした場合、この人は、一生懸命砂場で、自分が満足をするだけ全身全霊で、砂場の山やダムを作つて遊んでいるわけです。その時には、先生が出した材料とこちらとでは、Aさんの場合を考えた時、どちらがAさんにとつて大事な経験になるかを先生が考えたらよいのです。今ここで無理にだつてひっぱつてくれれば、

結局先生の威力によってひっぱれないことはないのですが、そうした時にしぶしぶやってくるでしょう。

「砂場でもう少しあの時にやれば、あつちにダムができるし、もっとこうやりたいと思っていたのにしかたがない」と思っているのをやるでしょう。そうすると一応製作はやりませんが、気持はまだ砂場に残っています。結局一応先生にいわれて誘導されてきましたけれども、ここで作るものはたださっさとやってしまうか、いやいやとやってしまうのです。こういうことの積み重ねをしてみてください、やはり、そこからは興味がだんだん減退してしまっていて、次に自分からしようという気持は、それがしてしまうわけです。砂場の方を十分して、いい時に入ってきてしてちょうだいね」というと、十分自分たちが遊んで「これで満足ないのができた、じゃあ、そこへ行って○○さんたちとか」を作ってください」と自分からやろうとして入ってきた時は、自分の気持を十分そこへ表現したすばらしいものができるわけです。

子どもは小さい子どもたちには、できがいいとかわるいとか、結果を要求しません。子どもながら、一生懸命したものは、いややったものより、皆さんご存知のように、結果的には、技法は下手でも、十分その人の力が表わせるわけです。自分の力をそこへ十分表わせると、次の興味が養われているわけです。さきほどのいうことが、その人には繰り返されているわけです。さきほどのいやいやの繰り返すと、自分が十分満足したものの繰り返すと

では、長い月日の間には、大分差がつくでしょう。なんでも夢中になってやる人、いろいろくふうしていく人と、義務感からやるものとの間には差がついてきて中途半端な人間ができてしまうわけです。そこには、創造性もだんだん姿を消してしまおうし、興味もなくなってしまうのではないかと思います。

ですから私も計画をたてても、もしその日にこれに参加しない人は、むしろ別のことをしておいた方がその人にプラスになるのだし、そのままこれに参加しないで結構だと思ふのです。そのくらいの大きな広い気持と考え方を持たないと、やはりこれが決断できないわけです。そのようにして明日やってもいいし、もしやらなかったら、やらなくてもいいのではないのでしょうか。どうしても、みんなが持っていて困るような場合には、むしろその人には先生の方が「これに入れておきなさい」と違ふものをおやつへの入れ物として与えるのもいいと思います。

全員一斉に作らせて、材料を与えてやれば、ばあっと一度に三十五人ができてしまいますけど、こういうふうには、かわりばんかグループを交代する場合は、時間がかかるわけです。ですからなかなか一日ですべてを計画するわけにはいきません。二日三日とか、大きな物になると一か月もかけて作りますから、次の日には必ず「僕も今日はやる」と、ちゃんと興味を示してくれるものなのです。そういうところは、あまり苦労はいたしません。

このようにして、お昼がきたら、「それじゃお昼だから」と、

お弁当のおしたくをしてやるわけです。こういうように一日がすぎます。

音楽リズムやおはなし

もう一つ、音楽リズムや、お話のような場合はどうしたらよいでしょう。音楽リズムにもいろいろやり方がありますが、やはり、自分ひとりでお遊戯をして楽しむというのはあまりこの年齢には楽しいというものではありません。おとなが一人でパレーを習って、それを音楽に合わせていけば、それは実に楽しいという場合もありますけれど、幼稚園はそういう専門の教育の場ではありませんから、やはりみんなといっしょにして楽しいのです。みんなと音楽に合わせて身体をいろいろ動かすので、そこで楽しさがあり、いろいろと音楽の指導ができるわけです。これはみんなと一緒にする楽しさで、一緒にした効果が、よりよくあちこちに表われるものですから、そういうものには「さあ、今日はお遊戯だから、みんなお遊戯室へいきましよう」でいいと思うのです。そういう時は、集めて皆一緒にします。

お話ももちろんそうです。絵本を見ることなどは少人数でしてありますが、「今日はみんなに、お話ししてあげましようね」などと集めていいと思います。お話でもお遊戯でもそうですが、さきほどと同様に、砂場の方でよく遊んで、十分にそこで活躍している場合は、「あなたもこれをやめて」とお遊戯にむりに入れるた

めに、いわなくてもいいと思います。お話でもそうです。「じゃみんなここでお遊戯しているから、あなたそこでおもしろいのできたからいいわね。もつといいの作って待っててね」とひとこといっておきます。

組で幼児を管理しなければならぬ場合もありますから、そういう管理の意味でも、そこへちょっと声をかけておく必要があります。そして途中で入ってくればなお結構だし、入らなくても、その人が今日一回お遊戯しなくても大きなマイナスはないと思います。むしろ、他の遊びでプラスになっていけばそれでいいと思います。お話もそれと同じ考え方でいいと思います。

そういうふうにして、お遊戯やお話は、比較的集めてする機会が多いです。

集める時の声のかけ方ですが、製作の場合は、朝からだんだんとしますから、子どもの生活を見ながらすすめればよいのですが、全員を呼び集めるような時には、やはりある子どもたちの生活を中断しなくてはならないわけです。ですから、相応子ども遊びをよく見てそれぞれ楽しそうに今ちょうど盛り上がりつつ、遊んでいる時に、先生は「時間だから、今しないこととあとのことに困る」と考えて「いらっしやい」とせっかくのところ呼び集めるのではいけないと思います。やはり皆と一緒に経験した方がいいと思う時には、子どもたちの生活を十分眺めて、今はこれならある程度遊びの波が下の方になったと思われる時期とか、十分やって興

味が少し次の遊びに移ろうとする時期とか、興味がある程度前よりもきめた時期とか、そういう時を察して「じゃお遊戯室にいきましょう」とか、「お話ししてあげましょう」とか誘うのです。外で十分遊んで、暑いときには、「今日は暑そうだから、あそここの木の下でお話ししてあげるからいらっしゃい」というふうな、時期を見極めてそれを持ち出さなければいけないと思います。そうした時、やはりさきほどのようにまだ他のことに興味があつて、残る人もいますから、そういう場合は、大きな気持で考えて適当な時期にさそつたらいいと思います。

先生の計画はこのように入れて一日をすごしております。

教師と子どもの密接な関係が必要である

このように製作をしたり、遊んだり、先生は忙しいですが、その中で、やれ、どこで怪我したとか、袖口をまくってあげても、砂場でよこれてしまったとか、ころんだとか、けんかしたとか、そういう一般の事件が、いろいろはさみ込まれてくるわけです。ですから先生はここでいくら自分の計画が製作であつても、その間にこのような生活の仕事が入ってきますから、大変忙しいわけです。先生はここで製作をしていて、製作にばかり集中しすぎるとそのことだけの先生になってしまいますから、やはり製作の指導の合間を見ては、砂場のようすを見たり、プランコのようなすす見たり、監督のようなことをしてよいでしょう。

ただ見るだけでもいいし、たとえ五分でも十分でもそこで遊ぶ機会を作つて、製作の方にもどつてくるとか、一か所だけの先生でなく、常に自分の組というものを把握していなければいけないと思います。こういうような生活をしていると、やはりいろいろの雑用もあるし、方々の遊びも見なければなりません。その中に遊びの指導があるわけですから、一つの身体で、大変忙しいわけです。

入園当初まだ子どもが十分遊べないうちには、なかなかこういう仕事を持ち出せません。子どもは入園当初に、五月のこいのぼりの行事があつて、みんなが、こいのぼりを持って帰らなければならぬので、大変困る時期なのです。まだあの時期には、じっくりと自分の思った気持や考えを表現した製作はできないわけです。やつと一学期ぐらいたちますと、そういうことができます。それには、さきほどから申し上げたように、先生と一緒に遊んで、遊びというものを充実させておいて、その上に立たなければできないわけです。一か月でできるか二か月でできるか、早ければ一週間でできるか、二週間でできるか、それに先生がまず努力して、一日も早く子どもたちがお互いに安定した生活ができるようになって、はじめてその上でいろいろと製作が可能になります。まだ十分できないのに、必ず一か月に一つは製作をしなければならぬとか、一週間に何かやらなければならぬと考へてするようなのは、結局製作の面においても活動したり、発表した

り、表現したりすることも、中途半端になってしまいますから、やはり遊びを充実させて、おおいに遊びの指導をしておいて、そして子どもたちの活動が十分できるようになって、その上に立つものだと思っております。

私どもも一人の身体ですから、三十五人いろいろの遊びにちらばって、これを常にすべて把握していなければなりません。それにはやはり、一番教育の根本である子どもと先生との密接な関係というものが根本になければならないと思います。部屋のある場所に立っていることで、三十五人の人に目に見えぬ系がつながれているような気がたいせつです。先生と子どものへだたりというのがあったのでは、やはりそれができません。密接にそれが一体になっていないと細い目に見えない、つながりができないと思います。

先生だからといって、常に、監督のようなつもりで子どもの遊びを見ていたり、何かをする時だけの先生では、本当の教育ができません。それは小さい人だけでなく、大きい人でもそうです。教育というものは、生徒と先生が一体にならないとできません。それが幼児にはもっともたいせつで、そこから遊びの指導もできるのです。

個性を尊重すること

一日の生活はこうして、おおいに子どもたちの生活を活動させ

ながら、その活動をより盛んにするために先生がいろいろと計画をもちだしてそして経験を広めて、そこから子どもたちが自分たちなりに学ぶものを引き出してもらおうようにすることが根本です。そして将来のより高度な学習に際しても、考え、くふうし、創り出す力を、幼児期の間で養っておくように指導しておくのです。それが私どもの務めだと思えます。

私どもの同じ園の中でも、組によっても子どもたちが違うのですから、この時期にはその人なりの力をのばしておいてあげて、そして十分それが将来活動できるように、そのもとを作っておいてあげなければなりません。現場では、毎日毎日が、「ああ、きょうはよくできた。きのうはここがどうもうまいかなかった」とか、「ここをやってあげればよかった」と毎日毎日反省の繰り返しだと思えますが、のばすことに力を注ぐのです。誰ちゃんはこのように性格でだめだとか、誰ちゃんはどうだとかいうのでなくて、すべてその人なりに、十しか力のない人は、十の力を出し、もちろん二十ある人は二十出してもらおうというように、なるべく今のうちに引き出してあげることがたいせつなのです。

そして将来学校生活をしたり、また社会へ出たりして、その人がりっぱにそれを使っていけるような一番もことになる時代が幼児期です。一日の流れに例をとって私自身の経験を申し上げた次第です。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

(これは幼稚園の先生方のために講演されたものである)